

I 活動状況

【プロジェクト1】 青木繁《海の幸》の“あ,, 文化遺産保存とコミュニティファンドづくりの条件整備

日本を代表する画家・青木繁が明治期に滞在し、名画《海の幸》誕生の家となった小谷家住宅（千葉県館山市布良）は、5年にわたり保存を求めてきた市民運動が実り、平成20年秋、館山市有形文化財に指定された。当NPOが事務局を担い、富崎地区コミュニティ委員会との協働で設立した「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」が、館山市教育委員会生涯学習課文化財担当の三浦太郎氏と館山市文化財審議委員の日塔和彦氏ら専門家を招いて文化財アドバイザー会議を開催するとともに、全国の美術関係者へ呼びかけ、修繕費用の基金づくりの検討をはじめた。この趣旨に賛同した故平山郁夫氏をはじめ美術大学関係者らが、東京・神奈川方面を中心にNPO法人青木繁「海の幸」会（理事長：大村智女子美大理事長）を設立し、小谷家住宅保存ファンドの活動をすすめることとなった。

1. 小谷家住宅や記念碑保存のための調査研究
 - ・文化財アドバイザー会議の開催
 - ・富崎地区にまつわる美術史研究や漁村集落景観の美術的検証など
2. 周辺環境の保全整備（草刈り等）
3. 文化遺産コミュニティファンドづくりの条件整備
 - ・連携協働体制の強化（イベント開催、パンフレット作成、広報PR活動など）

7月21日：館山市が「海の幸」記念碑の解説看板を設置（前列中央が市長）



11月16日：小谷家住宅の文化財指定交付（前列中央が教育長）



12月5日：市民活動フェスタ in 南房総で出店PR



12月16日：小谷家住宅周辺の雑木伐採



2月8日：小谷家住宅修繕等を検討するアドバイザー会議



2月8日：専門家による現地調査



【プロジェクト2】「安房節」の“あ” 漁村集落の生活文化の調査研究と記録・伝承

明治期に栄えた漁村・富崎では、危険なマグロ延縄漁で水難事故が絶えなかったため、沖合で漁師たちが舟唄「安房節」で励まし合ったという。「安房節」をはじめ、水産業衰退に伴い消えつつある伝統的な漁村集落の生活文化を調査研究し、記録・伝承の事業をすすめた。

1. 舟唄「安房節」の踊り習得と披露・普及
2. 安房水産業史からみた富崎村文書の調査と検証
2. ITのデータベース構築 ・ホームページ開設、記録保存
3. 広報活動 ・資料パネルの作成、市民活動フェスタ i n 南房総に出展PR

「安房節」の練習と披露・普及



10月3日：民話聞き取りの会



!! 見る 聞く 学ぶ 集う 千葉県南端 南房総・安房・地域まるごと博物館 安房国(あわのくに)再発見 !!
 「新たな公」によるコミュニティ創生モデル事業

漁村が誇る「3つの“あ”」のまちづくり

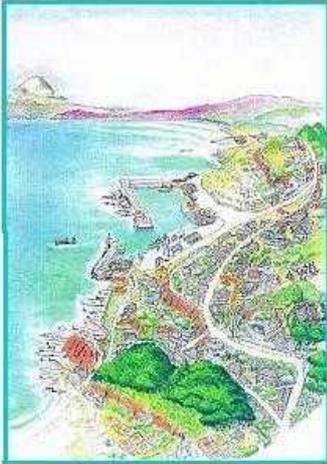
～青木繁《海の幸》・安房節・アジのひらき～

〒294-0036
 千葉県館山市館山95
 小高記念館
 TEL&FAX: 0470-22-8271



HOME	お知らせ	安房のあらまし	地域まるごと博物館	スタディツアーガイド	書籍紹介	NPO紹介	活動実績
持続可能なまちづくり	交流のひろば	フォーラム広場	新たな公	論文データベース	サイトマップ	お問い合わせ	

新たな公 » モジュールホーム 📄



房総半島南部の千葉県館山市富崎地区(布良・相浜)は、古くからマグロ延縄漁で栄えた漁村でした。明治37(1904)年夏、青木繁は布良の小谷家に滞在し、《海の幸》を描きました。水産業の衰退こともない少子高齢化がすすんだ富崎地区では、文化遺産を象徴する青木繁・安房節・アジのひらきの頭文字をとって「3つの“あ”」のまちづくりをすすめています。





富崎って
 どんなまち？

プロジェクト1
 青木繁《海の幸》の“あ”
 文化遺産の保存

- 青木繁《海の幸》
- 小谷家住宅
- 「海の幸」記念碑
- 富崎ゆかりの画家
- コミュニティファンド

プロジェクト2
 安房節の“あ”
 漁業の歴史と生活文化

- 安房節
- 富崎の生活文化
- 富崎の漁業史
- 富崎の地震と津波

プロジェクト3
 アジのひらきの“あ”
 食文化とまちづくり

- レシピ「おらがごっつお」
- 元気なまちづくり市民講座
- ウォーキングガイド
- 富崎歩こうマップ

アイテムナビ

青木繁《海の幸》の“あ”

安房節の“あ”

アジのひらきの“あ”

富崎ってどんなまち

サイト検索

検索

アクセスカウンタ

【プロジェクト3】アジのひらき コミュニティビジネス実現に向けての調査と人材育成

漁村ならではの伝統的な食文化「おらがごっつお(わが家のご馳走)」を調査し、館山市保健推進協議会との協働により一般市民を対象に料理教室をおこなうとともに、郷土料理レシピ集『おらがごっつお』の編集・制作に取り組んだ。市民の手書きによるウォーキングガイドのイラストマップを作成した。どちらも当該地区の全世帯 500 戸に配布寄贈し、地域への誇りを育むとともに、社会活動への参画を促進した。一般市民や来訪者向けに広く普及し、希望者には有償頒布として、次年度以降の増刷資金に充てたいと考えている。

聖徳大学生涯学習研究所やNPO法人全国生涯学習まちづくり協会との協働により、「元気なまちづくり市民講座」を開催、当該地区住民を中心に延べ90名が参加し、グループディスカッション等を通して地域活性化のプロジェクトを創出した。

1. 食文化「おらがごっつお(わが家のご馳走)」の調査
 - 住民アンケート調査、調理実習、レシピ集の編集・発行
2. コミュニティビジネスの実証
 - イラストガイドマップの商品化と販売
3. ガイド養成講座とまちづくり講座による人材育成
 - ツアーガイドの実践、観光人材育成研修、元気なまちづくり市民講座

11月19日:漁村の「おらがごっつお」料理教室とメニュー



10月21日:ツアーガイドの養成と実践



2月13・14日:延べ90名が参加した「元気なまちづくり市民講座」



郷土料理レシピ集「おらがごっつお富崎」



漁村が誇る
「3つのあ」のまちづくり
～青木繁《海の幸》、安房節、アジのひらき～

別府平野臨海部の千葉県館山市富崎地区(布良・相浜)は、船延焼船延焼の漁村として生きていた明治期に、日本を代表する漁家・青木繁が滞在して、『海の幸』を描いたことで知られています。しかし、近年の水産資源衰退に伴って少子高齢化が進み、500世帯1,000人の小さな集落となりました。かつて数千人いた富崎小学校は、児童数15名となっています。小規模校ながらも、漁村集落の文化遺産を象徴する「青木繁《海の幸》、安房節、アジのひらき」の類文字をとって「3つのあ」のふるさと学習、地域の誇りをはぐくむ教育に取り組んでいます。

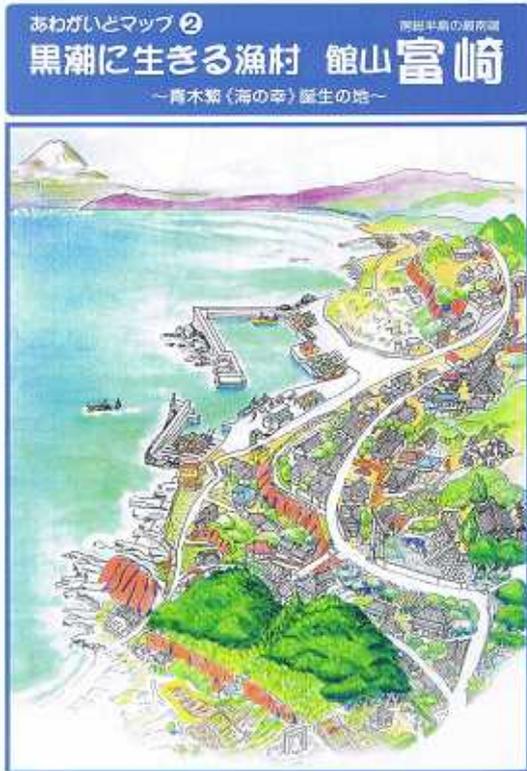
富崎地区コミュニティ委員会とNPO法人安房文化遺産フォーラムが全国の美術関係者に呼びかけて、平成20(2008)年秋に発足した「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」でも、「3つのあ」のまちづくり」をすすめています。

このレシピ集は、国土交通省の「新たなふ」によるコミュニティ創生支援モデル事業の一環として、富崎地区の皆さんといっしょに漁村の食文化「おらがごっつお(わが家のご馳走)」を調査し、まとめたものです。

平成22年2月

おらがごっつお 富崎
【目次】

- ☆ご飯ししび☆
 - 4- コシメゼ (ちらし寿司)
 - 8- まごちや
 - 9- タコご餅
 - 7- ココの細巻き寿司
 - 8- ブズメのづけ寿司
 - 9- シシバ竹の煮飯
- ☆汁物ししび☆
 - 10- モクズガニのすり流し
 - 10- イシジロの味噌汁
 - 11- カワハギの味噌汁
 - 12- じよだき (塩汁)
 - 12- コシロイの味噌汁
 - 13- アコウダイの味噌汁
 - 13- シシバ竹とジセガイモの味噌汁
 - 14- 磯コブの味噌汁
- ☆揚げししび☆
 - 15- シシバ竹の揚げめし
 - 15- ココの揚げめし
 - 16- 煮しめ
 - 17- タコ・ツルナの揚げめし
 - 18- 揚げ味噌
 - 18- 落花生の煮豆
 - 19- ダイコンの落花生なます
 - 19- ワケギの揚げめし
- ☆海のししび☆
 - 20- アジのひらき
 - 20- アジのひらき(揚げ)
 - 21- アジの煮付け
 - 22- なめろう
 - 22- たたき
 - 23- さんま焼き
 - 23- 炒りさんま
 - 24- ワカメの煮た
 - 24- ワカメのみち(煮)煮
 - 25- ワカメのしゃぶしゃぶ
 - 25- メイ(めい)の船味噌
 - 26- セジキの煮物
 - 27- タカノダイの仕上げ
 - 28- タガラのたれ
 - 29- タガラ味噌煮
 - 30- 岩ガキの甘露煮



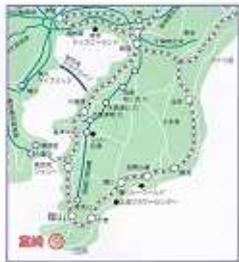
発行 NPO法人安房文化遺産フォーラム

漁村が誇る「3つの“あ”」のまちづくり

明治期にマダロ船乗船発祥の漁村として栄えていた館山市富崎地区は、近年の水産資源減に伴い、少子高齢化が進んでいます。

かつて数千人いた館山市立富崎小学校は、児童数15名(2009年度)となり、小規模校ながら地域の誇りを育む教育に取り組んでいます。そのひとつが、黒潮に生きる漁村富崎の文化遺産を象徴する「青木繁(海の幸)、安房節、アジのひらま」の頭文字をとって「3つの“あ。”」のふるさと学習です。

富崎地区住民と全国の実地研修者の呼びかけで発足した「青木繁(海の幸)誕生の家と記念碑を有する会」でも、漁村が誇る「3つの“あ。”」のまちづくりをすすめており、国土交通省の平成21年度「新たな公」によるコミュニティ振興支援モデル事業に選定されています。



◆ツアーガイドのご案内

黒潮に生きる漁村めぐりをしてみませんか。
対象 10人以上の団体
・ガイド料 参加者1人あたり1,500円～
(料金は行程・時期・日数によって異なります)

◆ガイドブックのご案内

『あわがいどシリーズ』
① 黒潮の恵
② 黒潮の歴史
③ 黒潮とともに生きるまち
④ 安房節を歩く
各600円

◆あわがいどマップ300円
① 漁村のまち館山

購入のご案内

● 富沢書店 ☎0470-23-7771
● Books 松田屋 ☎0470-23-1861

発行 NPO法人 安房文化遺産フォーラム

公式サイト <http://bunka-isan.awa.jp/>
〒294-0036 千葉県館山市館山65
小湊記念館
TEL&FAX: 0470-22-8271

イラスト制作 中屋晴哉
協力 青木繁(海の幸)誕生の家と
記念碑を有する会
公式サイト <http://acki-shigen.awa.jp/>
発行日 2009年9月

◆ブログ

● Blog 安房復興委員会
<http://ameblo.jp/awabunka1/>
● Blog 市良・稲沢の漁村日記
<http://ameblo.jp/mero-aihome/>

定価 300円(税込)

II 目標の達成状況

◎プロジェクト1. 青木繁《海の幸》の“あ”

目標:文化遺産保存とコミュニティファンドづくりの条件整備

⇒ 達成状況:

- ① 当プロジェクトに呼応して、館山市は「海の幸」記念碑の場所に案内看板を設置し、小谷家住宅は館山市有形文化財に指定された。「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」の活動として、当該地区住民が主体的に草刈りや雑木伐採などの整備保全を実施するとともに、「市民活動フェスタin南房総」に出展PRをおこなうなど積極的に地域活動に参加した。
- ② 館山市教育委員会との協働により文化財審議委員等の専門家を招いて「アドバイザー会議」を開催、指定文化財となった小谷家住宅の修繕について討議した。しかし、館山市文化財条例によれば、個人所有の指定文化財にかかる修繕費用は所有者負担とされ、この点でも官民一体となったコミュニティファンドの提案ができるかどうかの課題をもった。
- ③ 当事業の趣旨に賛同した美術関係者らが、NPO法人青木繁「海の幸」会を設立。発起人のひとりである平山郁夫氏が逝去したことは残念であるが、多くの画家や大学教授らが発起人となって文化財保存のコミュニティファンドのネットワークを広げ、全国的な活動に踏み出すという大きな成果が生まれた。
- ④ 趣旨と募金伝票を組み込んだ案内チラシを作成、地区内の全世帯 500 戸に配布し、告知・普及に努めた。同時に、全国の青木繁ゆかりの美術館や関係者等にも配布し、支援を依頼した。

◎プロジェクト2. 「安房節」の“あ”

目標:漁村集落の生活文化の調査研究と記録伝承

⇒ 達成状況:

- ① 「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」の地域振興活動として、舟唄「安房節」の踊りを習得、ウォーキングガイドやまちづくり講座などの折に披露。
- ② 旧富崎村の古文書などを調査研究、ホームページを開設し、データベースを構築。中長期事業として引き続きデータベースとして記録していく基礎を築いた。
- ③ 民話の会(主宰:松谷みよこ)が来訪し、地区住民より民話の聞き取り調査を実施、協働で調査・記録を始めた。

◎プロジェクト3. アジのひらきの“あ”

目標:コミュニティビジネス実現に向けての調査と人材育成

⇒ 達成状況:

- ① 漁村の食文化「おらがごっつお(我が家のご馳走)」を地区の主婦にアンケート調査し、調理実習を重ねてレシピ集を編集するとともに、一般市民向けには料理教室を実践し、好評を得た。レシピ集『おらがごっつお』は、当該地区の全世帯 500 戸に配布した。なお、このレシピ集に連動して、たてやまコミュニティビジネス研究会が「おらがごっつお」フライヤーを作成することになり、レシピ提供など食文化での協働事業を積極的にすすめた。
- ② 「おらがごっつお」メニューを地区内の旅館に提案したところ、実証実験的に取り組んでくれた。
- ③ イラストガイドマップを制作、当該地区の全世帯に配布寄贈し、大変喜ばれた。一般市民やツアー来訪者を対象に有償頒布をしたが、わかりやすいマップとしてとても好評であった。
- ④ 千葉県観光協会と日本観光協会が当該地区を舞台に、それぞれ観光人材育成研修を主催し、当NPOが受託しツアーガイドを実践。参加した観光業関係者から好評を得て、リピーター企画が持ち上がっている。
- ⑤ 「元気なまちづくり市民講座」を開催、2日間で延べ 90 名が参加。グループディスカッションでは、①地域の宝②子どもたちに伝えていきたいこと③生活する上での困りごとについて話し合い、さらに具体的な地域活性化アイデアを出し合った。その中から、「富崎地区の路地に愛称をつけてはどうか」という案にほぼ全員が賛同し、同地区コミュニティ委員会から住民に呼びかけていくことになった。

Ⅲ 地域における協働

- ・青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会（以下、保存会）＝当NPO法人が事務局を担当。
⇒ ほとんどすべてのプロジェクトにおいて協働で地域活動を実施。
- ・富崎地区コミュニティ委員会 ⇒ 事業についての告知PR、参加呼びかけ等における協働。
- ・館山市立富崎小学校 ⇒ 児童の参加には至らなかったが、設備等の貸借や「安房節」楽譜の提供等で協力を得た。
- ・館山市および館山市教育委員会
⇒ 小谷家住宅の文化財指定および、文化財審議委員を招いてアドバイザー会議の共催。
観光施策のひとつとして「海の幸」記念碑の場所に案内看板を設置。
- ・館山市保健推進協議会 ⇒ 食文化「おらがごっつお」研究および料理教室を協働で実施。
- ・千葉県／千葉自然学校 ⇒ 「市民活動フェスタin南房総」を開催、当事業として出展PR。
- ・聖徳大学生涯学習研究所／全国生涯学習まちづくり協会
⇒ 「元気なまちづくり市民講座」開催にあたり、企画・講師等で協力。
- ・NPO法人青木繁「海の幸」会（川崎市）
⇒ 当事業の趣旨に賛同し、小谷家住宅の維持修繕基金のためにNPO法人を設立。NPO理事長は、女子美術大学理事長。ほか同大教授や武蔵野美術大学学長らが発起人となっており、助言、コミュニティファンドの協働。
- ・石橋美術館、芳賀町総合情報館、梅野記念絵画館等 ⇒ 《海の幸》ほか各種作品の画像等を提供いただき、さらに本事業の情報を共有。
- ・青木繁旧居保存会（福岡県久留米市） ⇒ 情報共有。
- ・中村彝アトリエ保存会 ⇒ 情報共有。

IV 活動の結果、効果

(1) 課題の解決、コミュニティの創生

本モデル事業の活動は、地域課題の解決に向けて、おおむね有効な対策の端緒となった。

富崎地区コミュニティ委員会および連合区長会の役員が運営委員として名を連ねた「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」として、文化財保存・広報・地域振興・募金にかかる活動や交流の機会が増えたことにより、当該地区の文化遺産を自分たちで守ろうという誇りと自覚が高まってきた。

本事業の趣旨に賛同する美術関係者らが、東京・神奈川を中心にNPO法人青木繁「海の幸」会を設立して、小谷家住宅の修繕事業を目的にコミュニティファンドのプロジェクトを始めた。

本事業の成果物であるイラストガイドマップおよび食文化レシピ集『おらがごっつお』を当該地区の全世帯 500 戸配布したことにより、住民全体に本事業を周知することができた。また、ツアーガイドの実践では、舟唄「安房節」の踊りを習得したことで披露する機会もあり、これまでにない来訪者との交流を育み、地域振興活動への参画意欲が高まった。

「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」の公式ホームページのほか、ブログ「布良・相浜の漁村日記」を開設したところ、地元の主婦が編集委員に参画。毎日の風景や出来事、風物詩などをタイムリーに掲載。昨夏同地区がテレビ番組で紹介されたこともあり、1日のアクセス数が平均 100 件、多い日には約 500 件を数える。これがまた大きな励みとなって、まちづくりのモチベーションが高まった。

「おらがごっつお」料理教室では、参加した 50～60 代の地元主婦のなかでも、アジのひらきを初めてつくるという方がいて、地元でも世代間に継承されていない実態が把握できた。逆に、高齢男性が魚をさばく講師陣として参画。いつもと違うご近所のつきあいが生まれ、好評であった。

併せて「元気なまちづくり市民講座」の開催により、薄れつつあった地域住民の話し合いの場となり、延べ 90 名の参加者が積極的に地域活性化について討議を交わし、前向きなプロジェクトが創出された。NPO法人全国生涯学習まちづくり協会が認定する地域アニメーター資格（地域活性化に活躍する人のネットワーク制度）に 14 人が申請、登録した。

(2) 活動の持続可能性

本期間中に小谷家住宅が館山市指定文化財になったことは大きな一歩であった。ただし、館山市文化財条例をみると「文化財が個人所有の場合は修繕費用が所有者負担」とされている。指定文化財として修繕していくためには様々な制約があり、小谷家住宅の場合は、崖に面した立地にあるため、専門家による緻密な設計監理下の修繕や報告書の作成、そして実施するためには高額な修繕資金が必要であると、文化財アドバイザー会議で報告された。

地方自治体では財政難の折、民間の呼びかけによってコミュニティファンドの創生をすべく本プロジェクトを提案しているものの、現時点において当該自治体からはコミュニティファンドに関与していく旨の弁を聞いていない。とくに「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」およびNPO法人青木繁「海の幸」会では、修繕にかかる資金を募るにあたり、対象寄付が非課税にならないファンドにすることも課題である。たとえば横浜市や横須賀市の市民活動支援ファンドのように、市民団体やプロジェクトを指定して寄付の非課税が可能になるシステムを検討したい。久留米市では、青木繁旧居保存条例により、市民団体に維持運営事業を委託していると聞く。市民活動を活発化させていくためにも、早急に自治体や市民団体などが協働して仕組み作りの調査・研究が重要である。

来年は、「青木繁没後 100 年」である。「没後 50 年」に際しては、当時の館山市長が発起人代表となって全国の美術関係者と協働し、「海の幸」記念碑の基金を募り石碑を建立している。この取り組みに学びながら、「没後 100 年」を期して小谷家住宅修繕基金事業を展開していきたいと願っている。

一方、当該地区内において、本プロジェクトの趣旨を理解し賛同する住民は限られており、文化財保存やそのコミュニティファンドに対しての認識が弱い。引き続き「元気なまちづくり市民講座」などの開催を繰り返し、住民の誇りやモチベーションを高めていく必要がある。

文化財保存のコミュニティファンドとは別に、地域振興やまちづくり事業資金の調達についても大きな課題を抱えているが、徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」のような可能性を模索したい。

国の事業仕分けによって本事業が9割削減になったと聞き、大変残念である。ただ、次年度以降に1割の予算内で実施するフォローアップ事業において、具体的な相談・アドバイス業務に取り組んでいただけると幸いである。また内閣府の「新たな公共」円卓会議に期待するところが大きい。いずれにしろ省庁を超えた横断型のプロジェクトとして風通しをよくし、NPOや市民団体が参画しやすくするとともに、効果的なフォローアップをお願いしたい。市民活動のなかで身近に体験してきた「縦割り行政」の弊害にしっかりとメスを入れて、いま求められている横断型プロジェクトが実現しなければ、地域のなかで市民活動による「新たな公共」は生まれえないと思っている。

(3) 周辺への波及効果

本プロジェクト実施のなかで、館山市が「海の幸」記念碑の場所に解説看板を設置し、小谷家住宅が館山市指定文化財になるという波及効果があった。当NPOの要請に応じて、教育委員会では文化財審議委員を招き、小谷家住宅修繕についてアドバイザー会議を共催した。

故平山郁夫画伯をはじめとする画家や美術大学教授、美術関係者らが発起人となって、本事業と同じ趣旨のNPO法人青木繁「海の幸」会が発足した。ゆかりの「青木繁旧居保存会」や「中村彝アトリエ保存会」などと連携を図り、情報を共有している。

当NPOの本来事業である平和学習のスタディツアーに加え、リピーターや宿泊する場合のプランとして、「青木繁《海の幸》ゆかりの地めぐり」を提案し実施してきた。来訪者に大変好評なコースになっており、コミュニティファンドの趣旨に賛同し募金をする事例が多い。

昨今は、地域づくり視察として富崎地区の講演やスタディツアーが増えている。

千葉県観光協会と日本観光協会が、それぞれ当該地区を視察対象として観光人材養成研修を実施。当NPOでは講演やツアーガイドを受託し大変好評であった。参加者のなかから早速リピーターが現れ、3月以降においてスタディツアー企画が立てられている。

なお、日本エコウォーク環境貢献推進機構（愛知和男会長）では、エコウォーク（ウォーキングによる健康維持と自然・歴史環境学習）を通して得た収入の一部を、地域の自然・文化保護活動にドネーション（寄付）することで「環境保護や文化の発展に貢献」するプロジェクトを推進しているが、今春、当該地区をモデルコースとして選定、現在企画が進められている。

館山市商工観光課や館山市保健推進協議会との間で、協働して地域の食文化「おらがごっつお」のレシピを紹介するとともに、普及させていくプロジェクト事業をおこなった。

IV まとめ

全校児童数 15 名の館山市立富崎小学校が実践している「3つの“あ”のふるさと学習」に学びながら、地域づくりの視点を加味して本事業を立案し実施した。地域に住む子どもたちから高齢者まで、「青木繁《海の幸》、安房節、アジのひらき」を象徴とする漁村集落の伝統的な生活文化や知恵を学び、それを記録・伝承することで、地域に生きている意味を知るきっかけとなった。

地区住民には、住んでいる地が著名な画家・青木繁が《海の幸》を描いた場所であるという認識や関心は低かった。だが、短い期間ではあったものの本事業を通じて足もとの地域を見つめなおし、その魅力を再発見し、誇りと愛着を育む契機となった。当該地区の全世帯にイラストガイドマップやレシピ集を配布寄贈できたことは、これまでにない地域貢献となったと思っている。

富崎地区は市内でもとくに高齢化が進んだ地域で、いわゆる「限界集落」である。高齢化と言っても、寝込むことなく、生涯現役で生きがいをもって社会参画する「長寿」社会を目ざしたい。本事業ではその契機となるように、地区住民のモチベーション向上を図り、ガイド活動や文化財保全活動など活動の幅を一歩ずつ広げ、官民一体となった地域活性化のあり方をさぐっていった。

この間、同じ理念を共有する画家や美術大学教授らが NPO 法人青木繁「海の幸」会を設立したことは、館山市にとって頼もしい応援団が現れたといえるが、地元住民の関心や自治体行政の関与のあり方は、まだまだ望ましい協働の姿と言ひ難い。

民間の発意により取り組まれたこのプロジェクトに対して、館山の市民団体や行政機関が大きな可能性を見出すことができれば、今後、地域活性化の協働プロジェクトの切り札になるものと確信している。

なお、基金事業創設にあたって、寄付の税制緩和は大きな課題といえる。自治体が受け皿となって、「新たな公共」事業に対する寄付の非課税システムを早急に検討し、その施策化が望まれる。

本事業は事業仕分けで、次年度 9 割削減とのことだが、内閣府の「新たな公共」円卓会議が始まったことに期待し、是非、省庁を超えた横断型プロジェクトを実現して、引き続き、本事業のフォローアップをお願いしたい。

館山市の NPO 法人、安房文化遺産フォーラム（愛沢伸雄代表）は 13、14 の両日、富崎地区公民館で「元気なまちづくり市民講座」を開いた。地域住民ら、のべ約 90 人が

「富崎を元気に」まちづくり講座

館山

聖徳大の福留教授招き

参加。生涯学習まちづくりチームの「仕掛け人」今後のまちづくりに向けとして知られる福留強・聖徳大教授の講演を聞きし合った。



グループ討議を行う参加者＝富崎公民館で

福留教授は東京都立川市の大山自治会や、鹿児島県志布志市の市民大学の活動など、各地の地域活性化の成功事例を紹介。少子高齢社会の中で、いくつになっても地域のために自らの力を発揮していく「創年」という考え方を提唱し、「実年齢の 7 掛けが自分の年齢と違って、創造的に生きていこう」と呼びかけた。グループ討議では、「富崎地区の路地に愛称をつけてはどうか」という案にはほぼ全員が賛同。同地区コミュニティ委員会から住民に呼びかけていくことになった。

同フォーラムの愛沢代表は「青木繁の没後 100 年にあたる来年に

房日新聞 2010.2.19

向けて、地元の人びとや全国の関係者とともに記念事業に取り組んでいきたい」と語った。

【活動を通して得られた知見についてのアンケート】

(1) 活動の中で、当初の想定以上の成果があがったことがありましたか？

あれば、その内容と、想定される要因について全てお書きください。

- ・食文化「おらがごっつお」の料理教室では、世代間において食文化が継承されていない実態があることが分かり、高齢の地元主婦からも大変好評であったこと。
- ・IT広報活動の一環として始めた「ブログ布良・相浜の漁村日記」で、地元主婦が編集委員に参画。毎日の風物詩を紹介するようになり、好評。さらにテレビ番組で当該地区の漁協が経営するバーベキューが紹介されたことから、キーワード検索により、毎日のアクセス数が100件以上、多い日には500件近くがカウントされた。
- ・かつては「講」や「寄り合い」などが盛んであったが、過疎高齢化の進んだ昨今、地区住民同士が話し合う場が欠如していることが分かった。「元気なまちづくり講座」では想定以上に「おしゃべり」が弾んだ。

(2) 活動の中で、当初の想定どおりにはならなかったことや、新たに発生した課題等がありましたか？

あれば、その内容と想定される原因について、全てお書きください。

- ・指定文化財としての小谷家住宅を修繕するための要件は多く、そのため資金が高額となる。また、館山市文化財条例では、個人所有の文化財の修繕費用は所有者負担と謳われており、文化財保存を目的としたコミュニティファンドに対する自治体の関心や取り組み姿勢に課題が多い。
- ・当該地区は2つの集落（布良・相浜）からなるせまいエリアであるが、昔ながらの漁法の違いに起因するかと思われるような性質の差異があり、人間関係の付き合い方に影響を及ぼしていることが分かった。これを踏まえないと、裏目に出ることもあるという。

(3) 活動を通して、当初全く想定しなかった成果や影響が副次的に発生したことなどはありましたか？

あれば、その内容と、想定される要因等について全てお書きください。

- ・明治・大正期の美術史関連のネットワークを調査していたところ、地元にも著名な画家らのネットワークがあり、とくに大正期には館山を拠点としての美術運動もあり、全国的なつながりの掘り起こしが可能である。
- ・千葉県観光協会主催、日本観光協会主催の観光人材養成講座や、日本エコウォーク環境貢献推進機構のモデル地区として選定され、講座やウォーキングガイドを実践。さらに参加者のなかから、観光業者やまちづくり団体からのリピーター企画が誕生している。
- ・館山地区保健推進員が、青木繁ゆかりの地ウォーキングを企画・実施。当該地区の主婦がガイドとして活躍した。
- ・青木繁が滞在先の小谷家から館山を絶賛する絵手紙を親友・梅野満雄に送っているが、その子息が運営する信州の梅野記念絵画館を訪ねるツアーを企画し、3月7日に館山市民40名が訪問、交流を育んだ。

(4) 上記(1)から(3)に記載された内容によって、活動に当初想定もしなかった新たな展開があり、活動に広がりが出たり方向転換につながったりしたことはありましたか？
あれば、その内容についてお書きください。

- ・「元気なまちづくり市民講座」のグループディスカッションで、実現可能な地域活性化プロジェクトとして、「狭い漁村の小さな路地に愛称をつけたらどうか」というアイデアが出された。参加者の賛同を得て、当該地区コミュニティ委員会を通して住民にも呼びかけ愛称を募ることになった。

(5) その他、活動を通して何か気づいた点、既存の法律や制度等の課題、この活動を参考に同様の取組を検討する団体に対して是非伝えたい点等ありましたら、自由にお書きください。

- ・「新たな公」を担う市民活動が主体的にコミュニティファンドを創出するためには、寄付の非課税を可能にする仕組みが求められる。認定NPOという制度はあるものの、基準のハードルが高く、脆弱な組織ではとても困難である。また、ふるさと納税は活用分野を選択できても具体的な事業を指定できず、市財政に組み込まれてしまうのが難点である。先進事例としては、横浜市や横須賀市の市民活動支援ファンドのように、納付者が団体名を指定できる仕組みがある。自治体行政は、「新たな公」を支援するための事例研究や、地域で活躍するNPO団体の意向調査などのヒアリングや意見交換会をもっと積極的におこない、協働の可能性を真剣に模索するべきと考える。次年度のフォローアップ事業では、国から自治体行政に対して、こういった課題をどのように考えているのかをヒアリングし、「新たな公」と地方自治体が真の協働を図れるようなサポートを期待している。